

『教室の窓』一九五二年十二月（東京書籍）

## 単元の立て方と展開の仕方

国立教育研究所 矢口 新

### 基本的な態度

社会科の単元を構成展開する方法についてという注文であるが、その前に、まず基本的な態度について考えてみたい。

まず第一に、社会科は社会現象を教師と生徒が共同で分析するのだということである。何か教えなくてはならぬという意識よりも前に、社会現象の共同研究だということを考えるべきだ。これは当たり前のことだという人がいるかもしれない。その通りであるが、しかし、それがなかなか実現していないのである。

社会現象というのは、単に世の中のことという甘い考え方でとはえられない。社会という一つの見えざるもの、あたかも人間のごとき有機体——といっても社会有機体説をとるという意味でない、ただわかりやすく比喩的というまでのことである——の活動によってあらわれた現象、その表現というように考えるのである。これは世の中に行われていること、あるいは出来事についての一つの見方ないし態度である。この見方がわれわれにはなかなかむずかしいのである。たとえば今、○○村という社会において農業が行われているとする。具体的にそれはひとりひとりの百姓によって行われている。それらの断片をただとりあげてみるのではなく、むしろ一括して、その村という社会の生活の仕方として見るのである。単にひとりの百姓のやっている仕

事としての農業はこれであるというのではなく、その村という社会の必然的に生み出した生産という態度で見るのである。

「お百姓さん」という単元がある。どこの学校でも子供にお百姓さんはこんな仕事をするということをお教えている。それは、本当はひとりのお百姓の仕事を取りあげているのではなく、実はこの村のお百姓はだいたいこういうものだということなのである。それはお百姓の仕事を社会現象として取り扱うことなのである。ところが、実際はそういう意識が薄弱なのである。この場合大切なことは、この村のお百姓のすべてを問題にして、そこから社会現象としての百姓の仕事をとらえてくることなのである。

これがもつとはつきりするのは次のような例においてであろう。よく見かける例であるが、農業を取り扱った単元で、実に微に入り細にわたって農業の技術だけを教えているような単元がある。これは社会の現象として見ているのではなく、社会に行われていることを見ているということである。もちろん、それほど細かく見るにふさわしく、その社会の生活の仕方としての意味が追究されれば、それは社会現象として取り扱われていることになるのであるが、それは小・中学生には無理な場合が多い。そこでただ断片的なすがただけを詳しく見るということになる。これは社会現象として見ているのではない。

社会現象として見るというのは、いわば社会の法則にもとづいてあらわれたもの、として見ることで、その現象を生み出した法則を明らかにしようとするのである。法則との関係からその現象を説明しようとするのである。それには現象を多くならべて、そこから帰納したり、解釈したりすることが必要なのである。

もう一つ例をあげよう。社会には犯罪という出来事がある。その一つ一つが、どういふ筋書で行われていくかということは興味のあることかもしれない。また、刑事のような職業の人によっては必要な研究

であろう。しかし、社会現象として見るときは、それよりも前に、社会はどういう種類の犯罪を生み出しているか、ということが大きくとらえるのである。むしろ、社会の性質を、犯罪を通して見るということが大切なのである。すなわち、一般にその社会の犯罪者は年齢的に傾向があるかどうか、それらは、原因から見て何か傾向があるかどうか、などということ明らかにしようとするのである。そうして社会的対策を考えるのである。もちろんそういう態度で一つ一つの犯罪について細かく調べるといふこともある。しかし、それはあくまで社会現象として犯罪を問題にするという前提の上において成立つことである。いかなる教師も社会科で犯罪の一つをとりあげて、その経過を詳しく調べるなどということはしないであろう。それはどういふわけかをよく考えてほしい。なかなか重要な意味をもっているのである。こういう基本的態度で単元の構成ということを考えていこう。

## 学習の問題

普通、単元をつくるには、問題がきめられなければならないということがいわれている。これはどういふことかといえ、分析する対象としての社会現象はどういふものをきめるということである。研究対象は何かということである。大げさにいえば、あらゆるものが研究対象となりうるであろう。しかし、教育としては何がとりあげられるべきかということである。

この場合、現在の考え方では、さまざまな社会現象を、いくつかの領域にわけて、各領域でそれぞれ代表的、典型的な現象をとりあげようとしている。いわゆるスコープを設けて選択の範囲をきめ、片よらないようにしている。しかし、それだけではまだこれこれの現象を取り扱うべしとはきめられない。

そこで地域の課題ということが考えられてきている。それは社会生

活上、問題を含んでいる現象をとりあげようということである。そして地域ということを用いるのは、具体的な生活類型においてのみ問題を含んでいるかどうかということが考えられるのであるから、その生活類型を強く規定するものとして地域ということを考えているのである。同じ領域に属する社会現象でも、地域によって人々に強く関心をもたれるものとそうでないものがある。それはその地域の社会生活に大きい影響を与えるものとしてあるか、そうでないかということなのである。この重要な関係があるということが課題という言葉で言われているのである。地域の生活に関係ありということになれば、その現象を研究し分析しようという意欲も起るのである。また、研究方法もきまってくる。生活の実践的意欲が現象の見方を生み出すのである。

こういう問題を含んだ現象を教育においてとりあげるといふことである。そうすれば、地域の生活者としての子供が、具体的な問題をとらえ、それを自らの問題として研究しようという意欲をもち、そこから研究の仕方も考え出して研究していくことになるであろうと考えるのである。この研究を通して、地域の重要な問題を理解させると同時に、すべての領域にわたって社会現象をとりあげてそれを考えさせるから、社会現象というものについての考え方もあわせて身につけさせるということになるのである。

## 実態調査

いかなることが問題であるかがはっきりしさえすれば、実は単元の構成ということは終わったといってもよいのである。単元の構成を、指導案や学習展開の計画を書くことだと考えたら誤りである。あれは単元を構成する手段もしくはは方便にすぎない。単元構成とはどんなことを研究しなければならぬのか、それは具体的にどんな問題を含んでい

るのかを明確につかむことなのである。

ところが、この点が一般に誤解されている。研究問題が明らかでないのに、学習のプロセスだけを考えているのである。たとえば、次のような場合を考えてみたらよい。「工業と動力」という単元が指導要領にあげられている。そこで教師はその学習のプロセスをまず考える。そしてそれが単元の構成だと考える。ところが、これには大事なことが抜けている。その地域における工業生産がいかなる実態でどんな問題を含んでいるか、ということがまず明らかにされねばならぬのである。その地域の工業生産現象がどういう問題をもっているかが明らかにならぬ。たとえば、非常に発達段階が遅れている近代生産はほとんど行われていないという実情だとする。発達が遅れているということは、他の地域や日本全体の水準との比較からいわれることであろう。それは工場の規模や生産額や、機械の台数やさまざまなものを、他の地域のそれと比較して発見してくることであろう。子供もそういうことをやればよい。そうして材料を分析して自らさまざまな問題を発見するのである。

このように社会の実態の分析を行うことが非常に重要なことである。これが行われなければ、社会科で子供に研究させる社会現象が明らかでないということになる。それでは学習させることはできないはずである。にもかかわらず、一般には、それなしで観念的に、頭の中だけで学習の筋書を考えだそうとしているように思われる。これが現在の社会科の大きな弱点である。

こういう社会現象をとらえることを普通、調査といっているが、調査とは何も形式的に調査票をつかって、調査することではなく、教師がまず社会の現象を科学的に分析してみることをいうのである。そしてその材料には、いままで各種の機関で行われた調査資料を使えばよい。教師はこれらの材料を使用して、自ら論理をたてて社会現象を分析し、

問題を発見してみたらよい。そうして子供にもそういうことを考えさせればよいのである。

この場合、子供には子供だけの力しかないのであるから、教師が行った分析研究より、より具体的に、より概括的に行うことが必要であろう。それは一般的にいえば、人によって研究がさまざまな段階において行われるということである。だれでも人はその時の実力の程度でしか社会現象をとらえることはできない。しかし、そこから出発して一つの現象を分析し、問題を発見することによって、次第に成長するのである。そして、そういう研究―発達という過程を循環していくのである。それを可能ならしめる大きな要素は、人々の共同ということである。すなわち共同の学習ということである。

## 目 標

単元の目標をきめるということがいわれているが、これはどういうことであろうか。社会現象が分析されていく過程、問題が発見されていく過程で、子供がどんな新しい経験をしていくかの予測をしていることなのである。いかなる単元においても、結局は社会現象を分析してその問題を発見し、それを通じて社会についての考え方を学ぶということである。そして教育においては、やはり基本的な考え方をまず与えてやりたいと考えているのである。それは、教育は実際に働く人間を育てるということを第一義とする点から当然であろう。それがおそらく指導要領などに書かれている目標の意味であろう。その内容が果たして妥当かどうかは別問題としても、教育としてはそう考えるべきであろう。

そこで単元の構成という仕事においてその目標を考えると、これは、次のような意味をもつべきであろう。教師が問題を含んだ社会現象をまずつかむ。これを研究してみて、その結果どういふ

うに考えていったらよいか、そしてどんな問題が発見できるか、社会についてどんなことが明らかにされるかなどを整理してみる。そして、それが教育においてまず基本的なものと考えられているものかどうかが検討しておく。そしてこの問題について、この現象を分析すれば、ここで子供はこういう考え方をしなくてはならぬであろうということを考えておく。これが目標を考えるとということである。

目標は研究する問題と合わせて考えらるべきもので、目標だけを頭の中で考えてみることは誤りである。目標というのは、子供に与える知識と考えられてはならない。目標だけをひき出して考えると、とかくそういうことになりがちである。目標というのは、子供が対象を研究していく間に身につけていく考え方だということを、あくまで忘れないでほしい。

目標ということの中に理解・態度・技能という二つの分野をおいて考える習慣があるが、これが往々、個々ばらばらになって、単元としてのまとまりをぶちこわすものになっていることも注意しなければならぬことである。目標で中心となるのはあくまで社会現象の分析をする場合の社会の原理であって、それが社会科のねらうところなのである。態度とか技能とかはその考え方に付随しているものだということを忘れてはならぬ。大体、態度などというものは社会現象の分析ということでは養うことはできない。せいぜい考え方にわたる態度ができるかと考えらるべきである。実践行動としての態度というものは、行動を通してでき上がるもので、社会科ではその基礎としての態度についての基本的な理解を得させるということである。技能も同様であって、これが今はばく然と考えられているが、たとえば、統計をつくる技能というごときものなら、それは数学の分野のことである。社会科はそういうものを用具として、社会現象を分析することが中心にならなくてはならない。用具はこの場合は、第二義的に取り扱われるべきで

ある。態度とか技能とかが、何の関連もなく雑然とならべられて、それによって学習が行われると、社会科はある場合は統計表をつくる数学の時間であったり、ある場合はディスカッションをするクラス会であったりして、それらの雑然たる混合物が社会科だということになるのである。

## 展 開

次に展開ということがよくいわれる。どういう順序でどういう学習をさせていくかという学習活動の形態と順序、教材提出の順序、教師の問題提出の順序などをきめることなのである。先にも考えたように、これは現実には、その問題がきめることである。というのは、その地域の問題は、その地域の問題としてのあり方をもっているということである。それに応じて追究していくべきことである。すなわち、一つの現象でもいろいろな面から究明されねばならぬであろうが、そのいろいろな面は順序としてどこからどう究明されていこうと、結局は全体として明らかにされなければならぬことである。その順序などは人によっていろいろ異なるということである。まるで鎖のどこからはじめても一回りしてもとへもどってくるということである。大切なことは、いくつのふしがあるかということ、どの面とどの面から分析しなければならぬかということ、どの面とどの面から分析することである。その前後の順序はどうでもよい。

学習活動というのはこういう研究のことであり、形態を考えるとというのは、問題によって研究の仕方が異なることを考えることだといつてよい。教材提出というのは、どういう材料、あるいは研究対象、あるいは現象をどういうふうに取り上げるかを考えるということである。これらも教師において社会現象の分析が行われていれば簡単にできることである。